

1. 問題設定

1.1 研究の背景、注目する現象例

福井県の沿岸地域では、新田 (2012) による越前町小樟方言の報告以来、それまで存在すら知られていなかった未報告種のアクセント体系の発見が相次いでいる(松倉・新田 2016, 松倉 2017, 松倉 2022 など)。それらは上野 (2012) の類型における「三型アクセント」に該当し、語の長さにかかわらず常に 3 種類の声調が区別される体系である(鹿児島市方言など九州西南部方言の「二型アクセント」に比べて、区別される声調の数が 1 つ多い)。

当地の三型アクセントについて注目されるのは、声調の実現するドメインの不規則性・拡張性である。多くの助詞・助動詞の類は (1ab) に見るように固有の声調を持たず、典型的には、内容語の声調がいわゆる「文節」(橋本 1934) 全体をドメインとして実現する。しかしその一方で、ドメインが文節とは一致しない—例えば (1c)(2b) のように複数の文節にまたがる—環境も多く確認されており、結局のところ、「文節」という単位のみには捉われないで声調の実現ドメインを特定・記述することが必要になる。その韻律的なドメインにはどのような文法構造が反映されるのか、そして、どのような通時の変化がドメインの拡張をもたらすかについて、最新の調査結果を挙げながら考察する。

(1) 福井市蒲生方言における 2 拍 A 型名詞「箱」の音調¹ (A 型: ドメインの右端に HL を付与)

- | | | |
|-----------|------------|--------------|
| a. ハ[コ]=ガ | b. ハ[コ=カ]ラ | c. ハ[コ=ガ ア]ル |
| H L | H L | H L |
| 「箱が」 | 「箱から」 | 「箱がある」 |

(2) 福井市蒲生方言における 2 拍 A 型名詞「星」の音調

- | | |
|--------------|------------|
| a. ホ[シ]=オ ミル | b. ホ[シ ミ]ル |
| H L | H L |
| 「星を見る」 | 「星見る」 |

1.2 文法化研究との関わり

本稿で言う「声調が実現するドメインの拡張」には 2 種類の異なるレベルの現象が含まれる。一つは共時的な拡張と言えるもので、(2b) に示した「目的語+動詞」のような何らかの統語的まとまりに対応して複数の内容語を含む 1 つのドメインが形成される現象である。もう一つは通時的な変化としても捉えられるもので、(1) に例示したようにいわゆる助詞・助動詞などの機能語が韻律的自立性を失い、「内容語+機能語」で 1 つのドメインを形成する現象である。

機能語の韻律的自立性 (の喪失過程) に関する研究は文法化研究の一部に位置付けられる。文法化の過程には意味的・統語的側面の変化に加えて、接語・接辞化、音韻的実質の摩耗、ストレス・トーンの消失など形態音韻的・韻律的な自立性の侵食も生じることがよく知られる (Heine 1993: 56 など)。文法化研究は、意味的・統語的側面を見れば「内容語と機能語の間のカテゴリ

¹ [はピッチの上昇、] はピッチの下降位置を表す。

一の連続性」を捉える研究と言えるが(三宅 2005: 61)、形態・音韻面に着目すれば「語と接語と接辞の連続性」を捉える研究になるだろう。これまでは、文法化研究の文脈でも方言研究の文脈でも、特に韻律的な側面——文法化に伴うアクセントの変化——はあまり注目されてこなかったように思われる。本発表では、北陸の三型アクセント諸方言を例にして、様々な機能語(助詞・助動詞、テ形に接続する補助動詞、「ある」「なる」等の形式動詞)のアクセント上の振舞いを観察することで、文法化とアクセントの相互作用をめぐる新たな課題を提供することも試みる。

2. 対象方言のアクセント体系概説

本発表では福井県沿岸地域の2地点(坂井市三国町安島(あんとう)、福井市蒲生町)のアクセント体系を記述対象とする。いずれも近年になって「三型アクセント」が分布することが発見・報告された地点である(松倉・新田 2016, 松倉 2017)。2~4 モーラ (2~4 音節²) 名詞の実現型を(3)(4)に示す³。

(3) 坂井市三国町安島方言の2~4音節名詞

	2音節	3音節	4音節
A型	ハ[コ]	[ハ]コ[ガ] [サ]カ[ナ]	ハ[コ]カ[ラ] サ[カ]ナ[ガ] ニ[ワ]ト[リ]
	LH	HLH	HLH
B型	[ヤ!マ]	ヤ[マ!ガ] コ[コ!ロ]	ヤ[マカ!ラ] コ[コロ!ガ] ア[サガ!オ]
C型	[フ]ネ	フ[ネ]ガ ハ[タ]ケ	フ[ネカ]ラ ハ[タケ]ガ ア[マザ]ケ
	HL	HL	HL

(4) 福井市蒲生方言の2~4モーラ名詞

	2モーラ	3モーラ	4モーラ
A型	ハ[コ]]	ハ[コ]ガ サ[カ]ナ	ハ[コカ]ラ サ[カナ]ガ ニ[ワト]リ
	HL	HL	HL
B型	ヤ[マ]	ヤ[マガ] コ[コロ]	ヤ[マカラ] コ[コロガ] ア[サガオ]
C型	フ[ネ]]	フ[ネ]ガ ハ[タ]ケ	フ[ネカラ] ハ[タ]ケガ ア[マ]ザケ
	HL	HL	HL

両方言で区別される3種類の声調にそれぞれA型、B型、C型というラベルを付ける。各型の表面上のピッチパターンは2つの体系間で大きく異なるが、各型に所属する語彙は高い割合で一致する。

安島方言のA型はドメインの右端に(H)LH、C型はHLが付与される型である。ただし3音節以上のA型ドメイン末尾にある2つ目のHはしばしば抑圧され[ハ]コガ、ハ[コ]カラのように実現する発話も多い。B型はドメイン末で高いピッチから中程度のピッチへの小さな下降が生じるが、基底のトーンは無指定(無核型のようなもの)と考えておく。

蒲生方言のA型はドメインの右端から数えて1(, 2)モーラ目にHL、C型はドメインの左端から数えて2(, 3)モーラ目にHLが結びつく型である。B型はドメインの末尾まで平らなピッチが続くが、その直後に別の語が続く場合ドメイン末尾の境界には義務的に下降が生じる(例: ヤ[マガ+ミ[エル→ ヤ[マガ]ミエル「山が見える」。*ヤ[マガミエルは不可)。

両方言で「ガ」「カラ」などの助詞は自立語のドメインに組み込まれ、いわゆる文節全体にわ

² トーンを担う単位 (tone bearing unit, TBU) は蒲生方言でモーラ、安島方言では音節。

³ [はピッチの上昇、] は下降の位置を表す。! はHからMへの小さな下降、]] は拍内下降を表す。

たつて自立語の声調が実現する。蒲生方言ではドメインの長さが4モーラに満たないとA型とC型の対立が中和するが(例:ハ[コ]]＝フ[ネ]),助詞等を付けて4モーラ以上の文節を作るとその対立が表出する(例:ハ[コカ]ラ≠フ[ネ]カラ)。

3. 助詞・形式名詞の韻律的自立性

前節で助詞「ガ」「カラ」を含む文節の音調を示したように、多くの助詞は固有のトーンを持たず自立語の声調が実現するドメインに組み込まれる、韻律的な自立性の低い接語である。その一方、一部の助詞・形式名詞は固有のトーンを持ち自立語のドメインにも組み込まれないと解釈できる振舞いを見せる。(5)に安島方言の助詞「ドマ⁴」を例として挙げる。

(5) L音調を有する助詞「ドマ」(#は声調ドメインの境界を表す)

A型	ハ[コ]#ドマ	[サ]カナ#ドマ	ニ[ワ]トリ#ドマ
	LH L	HL N L	HL N L
B型	ヤ[マ]#ドマ	コ[コロ]#ドマ	ア[サガオ]#ドマ
	L	L	L
C型	[フ]ネ#ドマ	ハ[タ]ケ#ドマ	ア[マザ]ケ#ドマ
	HL L	HL L	HL L

A, C型に注目すると自立語部分にA, C型の声調が実現しその後「ドマ」が低く続いている⁵。またB型では自立語部分に平らなピッチが続き「ドマ」が低接しており、「ドマ」の次末音節に結びつく助詞固有のトーン(L)を想定できる。ただし自立語と同等の声調(A型、B型、C型)が指定されているわけではない点で、韻律的な独立性は自立語よりも低い。安島方言ではドマの他に、理由の接続助詞サケ(<境)、述語に付くダケ(<丈)、トキ(<時)、ホド(<程)、モン(<物)、ンタナ(<みたい)など内容語に由来し脱範疇化が進んだ助詞や機能語化が進んでいる形式名詞が同様の韻律的な振舞いを示す。文法化の過程にある形態素が、韻律的にも、接辞以上内容語未満という中間的な段階に位置付けられるわけである。

なお、コピュラ「ヤ」(<である)も語源に動詞「ある」を含み形態的な融合を経て成立した形式であるが、安島方言ではその活用形「ヤッタ」「ヤッタラ」などに語境界と韻律境界の不一致が観察される。語幹「ヤ(ッ)」までが直前の自立語のドメインに組み込まれ、残る活用語尾(接辞)が韻律的に独立する⁶—すなわちコピュラ内部にドメインの境界が走るのである。(6)に安島方言のコピュラの条件形「ヤッタラ」の音調を示す。(5)とトーンの分布を比較されたい。

(6) コピュラの条件形「ヤッタラ」

A型	[ハ]コヤッ#タラ	サ[カ]ナヤッ#タラ	ニ[ワト]リヤッ#タラ
	HL N L	HL N L	HL N L
B型	ヤ[マヤッ]#タラ	コ[コロヤッ]#タラ	ア[サガオヤッ]#タラ
	L	L	L
C型	フ[ネヤッ]#タラ	ハ[タケ]ヤッ#タラ	ア[マザケ]ヤッ#タラ
	H L L	H L L	H L L

⁴ 意味・用法は共通語における「なんか」「など」に相当。

⁵ 3音節以上のA型語にL音調を有する従属的な形式が後続する場合、2つめのHが消去される(例:[サ]カ[ナ]ドマ→[サ]カナドマ)。(6)の[ハ]コ[ヤッ]タラ→[ハ]コヤッタラなども同様の例。

⁶ 動詞語幹に付く-taraは韻律的に独立しない。

かつてコンピュータとその活用形は動詞「ある」のアクセントを引継ぎ韻律的に自立する語だったと考えられるが、現在の安島方言では1モーラの非過去形「ヤ」が従属的な接語と化している。その結果、他の活用形（「ヤッタラ」など）に対して、語幹部分「ヤ」のみ直前の自立語のドメインに組み込まれるという変化が及び、活用語尾が自立したまま取り残されたと推測される。

4. 補助動詞の接辞化・接語化

テ形に接続する補助動詞については、従来、主に意味的・統語的観点から本動詞との相違・連続性を分析する研究が重ねられ、個々の形式・用法ごとに文法化の程度が異なることが明らかにされてきたが、種々の補助動詞のアクセントについては（管見の限り方言も含めて）文法化と関連付けて注目されることがほとんどなかったようである。

安島・蒲生両方言の補助動詞は韻律的な自立性の有無に基づき、テ形と1つのドメインを形成するもの（Type1）、内容語と同様に固有の声調（A, B, C型の指定）を有するもの（Type2）に大別できる。さらにType2は安島方言で「常にテ形と補助動詞が異なるドメインに分かれる」もの（Type2A）と「テ形がC型の場合に限りテ形+補助動詞全体でB型になる」もの（Type2B）に二分される。

「居る」は両方言でType1に該当する(7)。形態的な融合も生じ、継続接辞 -tor, -te を取り出し得る。

(7) 安島・蒲生方言のテ形+補助動詞「オル／イル」

	安島	蒲生
上がる (A型)	ア[ガッ]ト[ル (A型)	ア[ガッテ]ル (A型)
下がる (B型)	サ[ガッ]ト[ル (A型)	サ[ガッテ]ル (A型)
歩く (C型)	ア[ルイ]ト[ル (C型)	ア[ル]イテ[ル (C型)

「見る」は両方言でType2（安島でType2A）に該当する(8)。テ形動詞と補助動詞それぞれの声調が保持されている。

(8) 安島・蒲生方言のテ形+補助動詞「ミル」(C型)

	安島	蒲生
上がる (A型)	[ア]ガッ[テ]#ミル (A型+C型)	ア[ガッ]テ#ミル (A型+C型)
下がる (B型)	サ[ガッ]テ#ミル (B型+C型)	サ[ガッテ]#ミル (B型+C型)
歩く (C型)	ア[ルイ]テ#ミル (C型+C型)	ア[ル]イテ#ミル (C型+C型)

授与動詞由来の「やる」は安島方言でType2Bに該当する(9)。テ形の声調によっては韻律的な自立性を失い得る点から、Type1とType2Aの中間的な自立性を有する形式と言える。「～てやる」は形態的な融合が進みながら韻律的な構造は変わらず維持されていることで語境界と韻律境界の不一致が生じている（例：[ア]ガッ[テ]#ヤ[ル] > [ア]ガッ[タ]#ル）。

(9) 安島・蒲生方言のテ形+補助動詞「ヤル」(A型)

	安島	蒲生
上がる (A型)	[ア]ガッ[タ]#ル (A型+A型)	ア[ガッ]テ#ヤル (A型+A型)
下がる (B型)	[サ]ガッ[タ]#ル (A型+A型)	サ[ガッテ]#ヤル (B型+A型)
歩く (C型)	ア[ルイ]タ!ル (B型)	ア[ル]イテ#ヤル (C型+A型)

主要な補助動詞の形態的・韻律的な振舞いを下表にまとめる。

表 主要な補助動詞の韻律的な振舞い

補助動詞	韻律@安島	韻律@蒲生	融合	関連カテゴリー
居る (～トル/テル)	Type1		○	アスペクト
置く (～トク)	Type1	Type2	○	アスペクト
もらう (～テモラウ)	Type2B	Type1	—	ヴォイス・受益
ある (～タル)	Type2B	Type2	○	アスペクト
やる (～タル/テヤル)			○	受益
くれる (～テッケル)			○	受益
行く (～テク)			○	ダイクシス・アスペクト
来る (～テクル)			—	ダイクシス・アスペクト
しまう (～テマウ)	Type2A		○	モダリティ・アスペクト
見る (～テミル)			—	モダリティ

特に蒲生方言で3種の授受動詞(やる、くれる、もらう)のうち「もらう」だけが韻律的な自立性を失う点、注目される。

(10) 蒲生方言のテ形+補助動詞「モラウ」

- 行く (A型) (息子に先に) イッ[テモラ]ウ (A型)
 住む (C型) (息子に近くに) [スン]デモラウ (C型)

他2語と異なる特徴としてはテモラウ文が受益者項の追加と動作主の降格というヴォイスの交替に相当する統語的操作を伴う点を指摘できるが⁷、これが韻律上の性質に反映される原理が明らかでない。現状あくまでも大雑把な観察にとどまるが、補助動詞の韻律的な自立性と関連する文法カテゴリーの間にはゆるやかな相関が見い出せる。すなわちヴォイスやアスペクトといった、承接順序で考えても語根に最も近い位置に現れる中核的な文法カテゴリーを担う形式は韻律的な自立性を失い(接辞化に向かい)、恩恵性、ダイクシス、モダリティといった主観的な表現を担う形式は韻律的な自立性を維持する傾向が表から見て取れる。また形態的な融合の有無と韻律的な性質の間にはあまり相関がない——それぞれ独立に生じる変化である——こともわかる。

同じ形式でも用法が異なれば韻律的な振舞いも変わる可能性が予想できるが、現在のところ、そのような例は見つかっていない。例えば「～である」の用法は行為の結果もたらされる〈事物の存在〉を表す用法と行為の結果もたらされる事態の〈存続性・有効性〉を表す用法の2つに大別できるが(益岡 1987)、2つの用法を比較してもアクセント面での振舞いには差が認められなかった。(11)に蒲生方言の例を挙げておく。

⁷ テモラウ文と使役文・受身文の共通性については数多くの指摘があるが(山田 2004: 113–114に研究史のまとめあり)、このうち益岡(2001)はテモラウ文を受身文に対応する「受動型でもらう」と使役文に対応する「使役型でもらう」に大別し、(a)のような「使役型でもらう」を使役文と強制性の有無において相補的な関係にある構文と位置付ける。(a)も形式上「受益表現」ではありながら必ずしも受益・恩恵の意味合いは強く伴わず、強制性のない働きかけ(依頼や許可)による事態の実現を表す。

(a) 花子に(頼んで)代わりに行ってもらった。(益岡 2001: 29)

(b) 花子に代わりに行かせた。(同上)

(11) 蒲生方言のテ形+補助動詞「アル」

- 〈存在〉 (机に花が) オ[イタ]#ル (B型+C型) 「(机に花が) 置いてある」
〈有効性〉 (先にその話を) ユ[一タ]#ル (B型+C型) 「(先にその話を) 言ってある」

安島・蒲生方言では差が見られなかったものの、方言によっては同じ形式でも文法化の程度によってアクセント上の振舞いが変わる可能性は考えられるので、調査を行う必要はあるだろう(文法調査に際してアクセントも併せて記録するのが効率的か)。

5. 「～がある」「～になる」の接語化

テ形に後続する補助動詞と同様に、動詞「ある」「なる」もまた実質的意味が希薄化した機能語的な働きを有することが指摘されてきた。古く松下 (1974[1930]) は「他語を以て其の実質的意義を補充する必要がある」語のうち「主客語を受ける助動詞」として「あり」や「なる」を挙げた(例:「徳望有り」、「大人になる」)。「なる」には変化の結果を表す補語が意味的に必須であり例えば「医者になる」「冷たくなる」などで1つの述語として機能する。また「Nがある」文の「ある」にも機能語的な側面を認められる。例えば「Nがある」文には「客がある」「痛みがある」などのように「ある」が「名詞の語彙的意味における性質を述語化する」(大塚 2004: 136)機能を担い、「Nがある」全体としてひとまとまりの述語とみなせる場合がある。あるいは「本がある」のように純粋に物理的な状態を描写する場合においても、「名詞にはそれ自体に「存在」というものが前提として含まれている」(同上)という見方をすれば物理的存在を表す「ある」も含めて実質的意味が希薄であると言えるかもしれない。

蒲生方言にはその機能語的な性格を反映して「ある」「なる」が韻律的な自立性を失う(接語化する)環境がある。

(12) 蒲生方言の「～ンナル(～になる)」文

A型	イ[シャン ナル	ク[ルマン ナル	ニ[ワトリン ナル	(医者、車、鶏)
B型	オ[ヤン ナル	ハ[シラン ナル	ア[サガオン ナル	(親、柱、朝顔)
C型	フ[ネン ナル	ハ[タ]ケン ナル	ア[マ]ザケン ナル	(船、畑、甘酒)

(13) 蒲生方言の「～ガアル(～がある)」文

A型	ハ[コガ ア]ル	(箱)
B型	ヤ[マガ アル	(山)
C型	フ[ネ]ガ アル	(船)

(12) の通り蒲生方言では「Nになる」文全体をドメインとしてNの声調が実現する。「Nがある」についてはNが2モーラ以下である場合に限りドメインの拡張が生じ得る⁸。「ある」「なる」を活用させてみると、非過去形の他は現在のところ「～ンナレ(～になれ)」でのみドメインの拡張が生じることを確認している。過去形「アッタ」「ナッタ」や否定形「ナラン」は韻律的な自立性を失わない。3モーラ以上の語はドメインの拡張に関与しないという音韻論的条件を想定できる可能性はある。

なお「Nになる」「Nがある」文のNを形容詞や名詞句が修飾している場合でもドメインの拡

⁸ 福井市蒲生町のおよそ15km南に位置し蒲生方言とごく類似するアクセント体系を有する越前町厨方言でも「Nがある」文におけるドメインの拡張現象が報告されている(松倉・新田 2016)。厨方言でもNの長さは2モーラ以下に限られる。

張が生じ、結果として統語構造と韻律構造の不一致が観察される (14)。

- (14) [エ]ー # イ[シャン ナ]ル (C型+A型) 「良い医者になる」
[キ]ノ # ハ[コガ ア]ル (C型+A型) 「木の箱がある」
タ[クァー] # ヤ[マガ アル]⁹ (B型+B型) 「高い山がある」

6. 「目的語＋動詞」の一語化

最後に、複数の「文節」にアクセント単位が拡張するもう1つ別の現象として、蒲生方言における「目的語＋動詞」の1単位化(目的語抱合)を取り上げる。

- (15) 蒲生方言における「2,3モーラ目的語＋見る／持つ」

A型	ホ[シ ミ]ル	オ[モ]テ # ミル	(星、表)
B型	ヤ[マ ミル	ア[サヒ] # ミル	(山、朝日)
C型	ソ[ト] ミル	ウ[シ]ロ # ミル	(外、後ろ)
A型	カ[ゴ モ]ツ	ツ[ク]エ # モツ	(籠、机)
B型	ハ[タ モツ	ホ[一キ] # モツ	(旗、箒)
C型	カ[サ] モツ	ハ[サ]ミ # モツ	(傘、鋏)

このようなドメインの拡張は対格助詞が介在すると生じない。また拡張が生じ得るのは原則として目的語も動詞も2モーラ以下の長さである場合に限られるようである¹⁰。さらに、様々な目的語を自由に抱合し得る動詞は数が限られるようで、現在のところ「出す」「撒く／蒔く」「見る」「持つ」の4語を確認している。一方、「折る」「聞く」「切る」「食う」「割る」は基本的に目的語との複合を生じない。「聞く」を除く他4語はいずれも被動作性の高い動詞にあたるようだが¹¹、動詞の意味が目的語抱合の可否とどう相関するかは今後の調査を待たなければ判断できない。

九州の二型アクセント方言の一つ、熊本県八代市坂本町上深水方言(山田2018)でも「目的語＋動詞」全体に目的語のアクセントが実現する現象が報告されている。調査の範囲内では全ての「無助詞目的語＋動詞」が1単位化するという(同上:24)。上深水方言と比べると、蒲生方言の目的語抱合はかなり限られた条件下でしか生じない。

なお、目的語名詞句を修飾する形容詞や名詞句は目的語とは異なるドメインを形成する(動詞に抱合されない)。結果として、(16)のような統語構造と韻律構造の不一致が観察される。

- (16) ン[メァー] # サ[ケ ノ]ム (B型+A型) 「旨い酒を飲む」
シ[レー] # ハ[ナ ミル (B型+B型) 「白い花を見る」

7. まとめ

本発表では、福井県の三型アクセント方言を対象として、声調の実現するドメイン(領域)がいわゆる「文節」とは一致しない例、および、形態統語的な単位との不一致・食い違いを生じる環境をまとめた。

⁹ タクァー [take:]。母音の融合(ai > ε:)が生じている。

¹⁰ 手持ちのデータには、目的語が3モーラ長でありながらドメインの拡張を生じる例が1例だけある: ユ[カタ「浴衣」→ユ[カタ キル「浴衣着る」。調査を重ねればこうした例も多く見つかる可能性はある。

¹¹ 名詞抱合の類型論的研究(Mithun 1984: 863)ではむしろ被動作性が高い他動詞(e. g. 'to make' or 'to eat')ほど名詞抱合を生じやすいという指摘がある。

まず3節では固有のトーンを有する助詞・助動詞の存在を取り上げた。固有のトーンを有する機能語・文法形式の成因は、意味・統語・形態面と韻律面で文法化の進度に差があることに求められる。機能・形態面では文法化が進んでいる形式であっても、韻律面では元来的内容語としての自立性を固持することがある。

4節では主要な補助動詞の韻律的な自立性とこれらが担う文法的機能の間のゆるやかな相関を指摘した。アスペクト・ヴォイスといった文法カテゴリーを担う補助動詞は韻律的な自立性を失い得る一方、モダリティ的表現を担う補助動詞は自立性を維持するよう見えるが、通方言的な傾向として成り立つのかどうか、調査地域を広げて確かめる必要がある。

5節では機能語的な動詞「ある」「なる」に限られた条件下ではあるが韻律的な自立性を失い直前の名詞句のドメインに取り込まれる場合があることを示した。

6節では「無助詞目的語+他動詞」という統語的単位においても韻律的なドメインの拡張が生じ得ることを報告した。

最後に、本発表で取り上げたデータや問題は、文法体系の記述とアクセント体系の記述を両立しなければ捉えられないものであることを再度強調したい。どちらか一方しか記述しないのは片手落ちで、多くの興味深い現象を見逃すことになる。日本語は、(狭義の)文法体系の地域差と同等かそれ以上にアクセント体系の地域差が著しい言語である。狭義の文法だけを比較すればあまり差がない2地域間にも、(狭義の)文法とアクセントの相互作用という観点からは、様々な地域差を発見できる可能性もあるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP24K16087 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けたものである。

参考文献

- 上野善道 (2012) 「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44-62.
大塚望 (2004) 「「～がある」文の多機能性」『言語研究』125, 111-143.
新田哲夫 (2012) 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1), 63-79.
橋本進吉 (1934) 『国語法要説』明治書院
益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30(5), 26-32.
松倉昂平 (2017) 「福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布」『東京大学言語学論集』38, 101-122.
松倉昂平 (2022) 『福井県嶺北方言のアクセント研究』武蔵野書院
松倉昂平・新田哲夫 (2016) 「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3), 81-96.
松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』中文館書店
松下大三郎著・徳田政信編 (1974) 『改撰標準日本文法』勉誠社 (松下1930の復刊)
三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1(3), 61-76.
山田高明 (2018) 「熊本県八代市坂本町上深水方言に観察されるアクセント単位の拡張現象」『音声研究』22(3), 17-28.
山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院
Heine, Bernd (1993) *Auxiliaries: Cognitive Forces and Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
Mithun, Marianne (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60(4), 847-894.